（様式第１号）

□　会議録　　□　会議要旨

会議の名称	第２回芦屋市学校教育審議会
日　　時	令和７年７月２９日（火）　１３時３０分～１５時３０分
場　　所	市役所北館４階　教育委員会室
出　席　者	会　　長　　河合　優年 副 会 長　　成田　健一 委　　員　　伊賀　友香子 田附　俊一 野村　浩子 木下　新吾 近藤　千恵 巽　愛子 欠席委員　　武田　淳 柏原　由紀
事　務　局	萩原　裕子　学校教育部長 塩山　利枝　教育部参事（学校教育担当部長） 長岡　良徳　教育部教育統括室管理課長 内藤　純子　教育部学校教育室主幹（幼稚園教育担当課長） 平野　雅之　教育部学校教育室主幹（幼保連携担当課長） 無量林良蔵　教育部教育統括室管理課長補佐 市原　輝幸　教育部教育統括室管理課主査（学事担当）
関　係　課	茶嶋　奈美　こども福祉部参事（こども家庭担当部長） 篠原　あや　こども福祉部こども家庭室主幹（保育向上担当課長）
会議の公開	■　公開　　□　非公開　　□　一部公開
傍 聴 者 数	４　人

１　会議次第

（１）　会長あいさつ

（２）　議事

①　会議運営上の取り決め事項の確認

②　諮問内容等の審議（就学前教育、保育の現状の課題等について）

（３）　その他連絡事項

２　提出資料

（１）　次第

（２）　説明資料

修学前教育・保育に要する市経費（１人あたり）

３　審議内容

〇事務局（長岡）　皆様、こんにちは。本当にお暑い中、お集りいただきまして、ありがとうございます。ただいまから、第２回芦屋市学校教育審議会を開催させていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、冒頭、河合会長様から御挨拶をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

○河合会長　とても暑い中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

前回の議事録も見ていただいているかと思いますけど、大事な委員会ですので、相談といいますか、皆で合議しながら、いい方向に行けたらなと思います。本日もよろしくお願いいたします。

○事務局（長岡）　続きまして、会議運営上の取り決め事項について、改めて御説明いたします。

この審議会は、芦屋市附属機関等の設置等に関する指針及び芦屋市学校教育審議会規則に基づき開催するものでございます。会議は、委員の過半数の出席がなければ開くことができません。また、会議は原則公開で行います。個人情報等の非公開情報が含まれる場合や、公開することにより公正または円滑な会議ができない場合については、会長が会議に諮って、出席者の３分の２以上の同意を得た場合は非公開とすることがあります。

会議の内容につきましては、発言者が特定できるように会議録を作成し、今回より、御出席いただいている皆様の御確認と、最後、会長と副会長に御確認いただいた後、市のホームページへ掲載いたします。また、会議録作成のため録音をさせていただきます。

それでは、会議の成立について御報告をいたします。

本日、10名中８名の出席をいただいておりますので、会議は成立でございます。

河合会長、会議の公開について、お諮りをお願いいたします。

○河合会長　会議の公開、傍聴していただいてよろしいかということでありますけど、今、多くの方に知っていただきたい、市民の方には知っていただきたいと思いますので、公開したいと思いますが、いかがでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

○河合会長　御異議ないものといたします。

それでは、入っていただいて結構です。

○事務局（長岡）　傍聴の方は４名いらっしゃいます。入室いただきたいと思います。

（傍聴者　入場）

○事務局（長岡）　前回の第１回学校教育審議会で御欠席されておりました野村委員様から、簡単に自己紹介お願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○野村委員　皆様、こんにちは。はじめまして、野村と申します。

前回は海外におりまして、申し訳ございません。海外からオンラインとかでも参加できればしたかったんですけど、そういうシステムはないということだったので、欠席させていただきました。

自治会連合会の第１０ブロックの理事を今しておりまして、そちらから今回、参加させていただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（長岡）　早速ですが、この後の議事については河合会長にお願いしたいと思います。会長、どうぞよろしくお願いいたします。

○河合会長　それでは、司会をさせていただきます。

前回、この会の一番大事なところは、ともかくそれぞれが思っていることをここではお話ししてもいいんだという認識を持っていただくことが一番大事ですと、そういうことで合意をいただいたことと、あと、市の人口統計等も含めた説明をいただいた後、議論、今日も続けて、それぞれの取組とか課題についてお聞かせいただきたいと思いますけど、その中で何が一番大事なのかというと、子供である。少子化で子供が減っていくという事実はあるかもしれないけど、一人一人の子供は１回しかない人生を一生懸命生きているので、子供を中心として、我々が子供たちのために何らかの設計をしていくことができるのであれば、そういう方向で進めていきたい、そこまでは合意できたかと思っております。

施設の問題はどういう表現すればいいんですかね、ゴールではなくて、子供たちが本当に幸せな未来を、次の世代をつないでいってくれる、そのときの土台になるものなので。そこをどう考えるかということで、施設とか教育のつくり方と言いますか、それはプロセスです。だから、やっぱり子供を中心として。

そうするためにはどんなことが必要なんだろう、どうしたらいいのだろうか、今はどうなっているのだろうか、どっちかいうとゴールから下のほうを考えていっていただく、現状はこうだからこう言っている。その両方をお考えいただければと思います。

本日も、それぞれのお立場で御意見をいただくことになります。前回の会議で、市の現状についてのお話をお聞きしましたけど、もう少し掘り下げて、課題といいますか、今、こういう状況になっているんだという現状認識を、我々、もう一度ここで確認をして、それを１つの検討材料として、また次の検討に入っていきたいと思います。

持続可能性というか、会議って決まり切ったことをシナリオに従ってやるのではなく。

でも、芦屋市だけじゃなくて、下手すると本当に阪神市なんて、真剣に考えないといけないぐらいに、人口の減り方は、この前出ましたけど、半端じゃないです。世界の政情も非常に不安定なので、持続可能な、子供たちが学んで育っていく、そういう場所を維持していくこと、それがずっと続いていくことができるような観点から、今の状況を説明していただければなと思います。

そのことは、事前に私からも、もう少しきちっと、こんなふうになってるんですということを含めて、もう一度、御説明いただければということで、市教委にはお願いをした次第です。

○事務局（長岡）　会長がおっしゃっていただいたように、事前に、持続可能な新サービスの観点からも検討が必要ではないかというお話を頂戴しておりまして、資料の作成がギリギリになって申し訳ございませんでした。当日配付という形でさせていただいております。

前回、御提出させていただきました資料につきましては非常に膨大な資料になっておりまして、なかなかどこを見たらいいのかも難しいかなという声も頂戴しましたので、今回配付させていただいている資料につきましては、できるだけポイントを絞って、簡素な形

で御理解いただける状況になるように心がけて作った次第でございますが、その内容について、私から御説明させていただきたいと思います。

本日、配付させていただいております「第２回芦屋市学校教育審議会提出資料」というカラー刷りの資料を御覧いただけますでしょうか。Ａ４の一枚物でまとめさせていただいております。

項目といたしましては、１つ目が就学前教育・保育に要する芦屋市の経費が１人当たり幾らかかっているのか、あと、人口推計、４・５歳児の通所・通園先が芦屋市の場合、どういったところに子供さんが通われているのか、今回、まとめたものでございます。

順番に御説明をさせていただきたいと思います。

まず、「就業前教育・保育に要する市経費（１人あたり）」。現在、直近の部分につきましては令和５年度の決算数値が公表されてございますので、その数値を基に記載をさせていただいております。

比較対象といたしましては、公立幼稚園と公立のこども園等、「等」の中には保育所も含まれてございます。それと、私立のこども園等、この「等」の中には私立の保育所も含まれております。

公立幼稚園、公立こども園等、※１、※２で、注釈を資料の一番下につけてございます。皆様、よくよく御存じかとは思いますけど、公立幼稚園につきましては、岩園幼稚園を除きまして４・５歳児を対象にしていることと、保育時間、また預かり保育の時間についてはこういったことでございます。

公立こども園と保育所も含めて、対象につきましては、１号認定、３歳児から５歳児と、２号認定も３歳児から５歳児、３号認定、０歳児から２歳児で、それぞれの認定がございますし、また、保育時間につきましても幼稚園よりも長い時間、保育してございますし、預かり保育についても、大体、夜の７時ぐらいまでは一般的に保育はしているところでございます。

そういった背景もございますので、１人当たりの経費としては、公立幼稚園で約120万円、公立こども園等につきましては170万円弱になります。０歳児からも入ってございますので、やはりこども園等については一定の経費がかかっているところが見てとれると思います。

私立のこども園等についてはどうかということで、試算をしていただきましたら66万円でございます。

公立と私立が、金額が違うじゃないかという御指摘がございますけど、仕組みといたしましては、公立の幼稚園もそうですけど、公立の保育所等につきましては、原則、市の経費を賄う、若干補助が入ってるところもありますけど、考え方とすると市が経費を負担しております。

私立につきましては、新制度移行後、その費用の負担につきましては、考え方として、

２分の１は国、４分の１は県、残りの４分の１については市が負担するところですので、ざっくり言いますと、４分の３は市以外がみてもらえるところがありますので、公立と私立等では差が出てきているところでございます。

きれいに４分の１とか４分の３という数字はなりませんけど、一定、そういった財政的な負担の違いがあるところを御認識いただければと思ってございます。

参考に書かせていただいておりますのは、公立幼稚園につきましては、毎年、子供さんが減ってきている状況がございます。６年度、７年度、これは実績の子供さんの数ですが、６年度147人、７年度132人、園を運営するに当たっては、一定の財政的な負担が全体としては必要でございますので、それを１人当たりにならすとどうなるのかで、５年度の決算の数値を基に置き換えますと、６年度においては約170万円、７年度においては約190万円。財政的な負担が出ておるところを御理解いただければと思ってございます。

次に、人口推計です。先般の学校教育審議会におきましても、数値は提出させていただきました。ただ、若干、令和７年度につきまして、今現在の市の総合計画の策定が動いてございまして、整合性を取るには、市の最上位計画であります総合計画から人口であったり、推計を持ってくるのは今の時点では適切ではないかと事務局で判断いたしましたので、７年度については、少し数字を前回の資料から変更してございます。

この表から見てとれるところにつきましては、基本的に子供さんの数については横ばいという状況が出てございました。ただ、総合計画の作り方といたしまして、様々な施策を総動員して、人口の減少幅を抑えていきたいということで策定していることもございますので、可能性としては、子供の数が今回想定しているよりも少なくなるかもしれませんし、市全体の人口としても減ってくると思いますが、現時点での数値としては、子供の数がＶ字回復するような、状況ではない。ベースとしては子供の数があまり変わらないところで頑張っていきたいところでございます。

最後に「４・５歳児の通所・通園先」で、今回、資料を作成させていただきました。見てとれますのが、ブルーのところです。市内の保育所とこども園の２号、いわゆる保育が必要な子供さんについて、４・５歳の半分の子供さんがそういったところに通所・通園されております。

市内の公立幼稚園につきましては、岩園の３歳は除いてますが、116人、約全体の１割程度。市内の私立幼稚園についても約１割で。あと、市外の私立の幼稚園については100人弱、７％。最後に市内のこども園の１号で、こども園の教育ニーズを必要な子供については154人で12％。認可外だったり、その他、通所先が不明なお子さんも一定いらっしゃいますけど、この表から、約半分は保育が必要で、こども園なり保育所に通われているところが見てとれるかなというところでございます。

簡単ですが、説明は以上でございます。よろしくお願いいたします。

○河合会長　御説明をいただきましたが、全体についての御説明で、それぞれのするべきこ

と、圏域についてのそれぞれの動態も検討しなければいけないと思います。

微修正をしたとしても、やはり子供の人数が増えていくことはちょっと期待できない。これは、別に芦屋市だけの問題ではなくて、日本全体の問題、大きな大きな問題だと思います。

一つはそういうことかと思います。増えていく、もちろん子供の人数が爆発的に増えることがもしあれば別かもしれませんけど、少なくとも我々は、現状の状態の中で子供たちにとって一番いい状況と、どういう環境を用意すればいいのかで、現状での最適化を考えることになると思うんです。

このままで、幼児教育、児童教育を維持していくことは、なかなか成り立たないということかなと思います。

あと、経費の問題です。お金は必要であれば、僕は出さないといけないと思います。ここで生きている子供たちに対して、どういうふうにできるのか。ただ、そのときに最適化というのか、コストと、そこから得られている子供たちにとっての、利益という表現はよくないですけど、そのベネフィットを考えたときのバランスはおのずとあろうかと思います。

そこら辺も、どこかの段階でどういうふうに子供たちの環境を整備していくかというときには、検討せざるを得ないだろうなと思いました。

今、御説明いただいたことと前回の資料、実は私もこれをもう一度見直して、グラフを作ったりしてたんですけど、ちょっとこのままではなかなか厳しいなと思いました。

そういうことを完全に理解できるということは、なかなか難しいと思いますが、子供たちを取り巻いている大きな環境と、実際のベネフィットとコストのバランスの問題を考えておきながら、子供たちの課題といいますか、その辺りのことについて、少し意見交換をしていきたいと思います。

前回は子供の人数、田附先生のほうから、いや、１クラス当たりの子供が少ないとよくないんだということについて、必ずしもエビデンスがないとお聞きしました。子供の人数が少ないとどうかとか、今、いろいろ問題になっている子供たちの問題行動、そのことについては、前回、十分お話できてないと思うんですけど、今日はそれぞれの立場で、市立幼稚園であれば市立幼稚園としての課題、今抱えている問題。また、それにどういうふうに取り組んでおられるのか、そういうことを少し自由にお話ししていただきながら、意見をまとめていきたいと思います。

何が起きているのか。現場からということで。

○巽委員　前回もお話が出たように、本当に現場の園児はどんどん減ってはいるんですけど、減ったら減ったなりにすごくいいことも、少人数のよさがあります。保育をしているときに、これが課題というよりは、できるだけ少人数を生かした保育をしようと思って、いろんな地域の方のお力を借りて、ボランティアの方に来ていただいたり、地域の未就学施設

に遊びに来てもらったり、遊びに行かせてもらったり、少人数を生かした保育を展開していて。なので、それを課題と捉えていないといいますか、それを生かした保育をしようと、それぞれ公立幼稚園各５園、その園その園なりに努力をしていると思います。

潮見幼稚園も、今、隣に近隣の小学校がありますので、そこの小学校と、潮見タイムという中休みに一緒に遊ぶ活動が３年目になって、すごく展開が広がってきまして、最初は１年生と５歳児だけの関わりだったんですけど、今は４歳児・５歳児と２年生・３年生、また５年生というように学年も広がってきたりとか、自分のところでできる努力を、少ない人数を生かした保育を展開しているつもりです。

課題といいますと、卒園した保護者が、潮見幼稚園に入れたかったんだけど、フルタイムで働くようになったので、保育時間が短いとどうしても下の子は保育所等でお世話になるとの声が聞こえてきていますので、ハード面の課題は感じております。

○河合会長　どっちかいうと、課題というよりも努力されている。

○巽委員　ただ、この経費を見て、ちょっとびっくりしております。

○河合会長　前向きのというか。

それは現状としてよく分かるし、よく努力されて、上から目線で言うように聞こえるといけないので、すごい一生懸命されているなと思いますけど。限界点みたいな、これ以上下がったら、もうあかんわという。これを超えると、生き生きしなくなるん違うかという限界はありそうですか。厳密に答えろという話ではなくて、ずっとこのままで行ったら、自分たちの努力ではどうしようもなくなるよねというのってあるんでしょうか。

○巽委員　他市さんとも情報交換をしたりして、西宮市さんだったら、一桁が何年続いたら閉めるとか、川西さんだったかな、複式学級といって４歳児と５歳児を一緒に、一クラスとして保育する人数を、たしか５人だったかな、数を決めてらっしゃる市もあるんです。芦屋市は、まだ数が決められていないですけど、私、前回も申し上げたと思うんですが、やはり適正配置といいましても、今の園の状態でしたら、こうやって努力して努力して努力しても限界を既に感じています。

うちの潮見幼稚園に限っては、今年度は去年度よりも園児が増えておりますけど、来年はと思ったときに、３年保育であったり、長時間保育であったりするところに、どうしても仕事をされてる保護者が、今、この円グラフを見てもすごく感じるんですけど、２号認定のお子さんが増えてるので、幼稚園が今のこの形のままだったらとても厳しいなと、私、個人的に思っていることです。

○河合会長　どうぞ。

○木下委員　私、小学校の現場なので、小学校から見た感じの就学前での、課題と言えるかどうか分かりませんけど、私の思ってることを。河合会長が話しやすいような空気をつくっていただきましたので、ずれるかもしれませんけど、ちょっとだけよろしいですか。

芦屋の子供たちをどうするかを考えますと、全ての子供たちという観点がありますので、

小学校でいいますと、実にいろんな就学前施設から、たくさんの子供が入学してくるんです。私の勤めている精道小学校でも、他市町からも合わせて、たった１人しか来ない園児も含めて、20施設ぐらいから来るんです。本当に令和を生きる小中学校の子供たちは、今の社会の流れもありますけど、本当に多様化しておりまして、様々な学び方が認められて、その子らしい生き方とか、あり方が尊重されるような教育を小学校の場合でもしてるんです。

いわゆる「自由の相互承認」という表現がいいのかどうか分かりませんけど、誰もが自由に生きて、他の自由を奪うことはいけないけど、そうでなければ、どんなことでも認められている、そういう社会になってきております。

ですから、小学校におきまして、今、思ってるのが、学校になかなか来ることができなかったり、教室に入ることができなかった別室の子供たち、その子たちもその子なりの学び方で頑張ってるんです。

１０年前、２０年前ぐらい前を思い返したときに、いわゆる不登校と呼ばれる子供たちって、一概に言えませんけど、割と５年生、６年生ぐらいで、ちょっとなじめなかったなという感じでしたが、最近は、個人情報ありますので詳しくは言えませんけど、１年生とか２年生とか、割と低学年でもぽつぽつ出てきたりして。それがいいか悪いかじゃないです。その子なりの学びがあるのでいいですけど、そういったこともあるんです。

しかし学校としましては、いろんな子供たちが集まって、対話しながら学びを深めていくところも大事にしたいし、そういった学びの喜びも感じてほしいので。それがなかなかできないとこ、今、課題ではあるんだけど。いろいろ考えてみましたら、最も幼い時期である就学前施設の活動の体験とか、本当にそれが基盤になる部分がとても重要だなと、特に今、着目しておりまして。保・幼・小の接続については、今一度、見直さなあかんなということで、実は小学校長会の中でも、結構それが話題になってるんです。

とりわけ、私が思うのは、小学校に隣接している、例えば幼稚園です。公立だったら潮見幼稚園とか宮川幼稚園とか岩園幼稚園はとても連携しやすいです。立地が近いのがすごい強みでありまして。ドアを開けたらすぐに小学校あるので、必然と連携が生まれるんです。

精道小学校につきましては、公立幼稚園は近くにありませんけど、こども園があるんです。道を隔ててすぐにあるんで、すごく連携をします。授業を見たり、保育を見たり、お互いの行事を行ったり来たりとか。職員は行ったり来たりするんですけど、子供は残念ながら、こども園の子が小学校に来るだけで、小学校の子はなかなかそっちに行くことは、今、できてないですけど、いずれはそういったこともしていきたいし、これだけ少子化になってるからこそ、多様化の時代だからこそ、いろんな子供たちが異年齢で合わさっていくのが非常に大事やなと思ったりしてます。

今、小学校区と全ての就学前施設の交流を意識した連携は、本当に必要で、これからの

子たちの学びにおいては一番大事じゃないかなと思うんです。就学前の子供たちの体験がベースになっているところは、大事にしながら、より連携を深めていきたいなというところは課題かなと思ってるので。

漠とした私の感想なので、それがどう絡むか分かりませんけど、小学校から見たら、そういうところをすごく大事にしていきたいな。これからどのようになるにしても、そこはよりきちっと芦屋の子供たちの未来を考えて、幼いところから、特に保・幼・小の辺りの連携。中も連携は大事ですけど、特に最初のところは大事じゃないかなというのは、私は思ってるので、意見だけ言わせてもらいました。

○河合会長　なかなか難しい現状ですが。お聞きしたいなと思ったのが、低学年でも学校への行き渋りが出てきている。不登校の定義はいろいろ厳密なものがありますので、そうでなくても行き渋りがある。

学校での問題行動はいじめと不登校ですけど。低学年ではいじめが多くて、小学校２年生がいじめの全数のピークになっています。それは、またここでも披露していただくことになるかと思うんですけど。

不登校は小学校の４年生ぐらいから現れて、６年生から中１ぐらいでピークになる。

○木下委員　また、新たにいろいろと問題が生じてきています。

○河合会長　それが幼児教育と学校との教育をつないでいくときの考え方も、少し修正しないといけないかもしれないなと、直感的ですけど、思いました。また、資料を確認して調べてみます。

いかがでしょうか。木下先生と巽先生の質問というか、御意見について。

○事務局（長岡）　今、木下委員から御発言いただきましたとおり、芦屋市内では、保・幼・小の連携は、既に今現在でも取り組んでいただいておりますので、せっかくですので、公立の幼稚園の先生と保育所の先生に来ていただいておりますので、今、どういった取組をしてるかとか、そういったことを御披露していただいたらどうかなと思って、手を挙げさせていただきました。

○河合会長　はい。

○巽委員　先ほどちらっとお話しさせていただいたんですけど、潮見幼稚園は潮見小学校と隣接しておりまして、特に、通用門があって、ドアを開けたら１年生と２年生の教室にすぐつながっているという通用門で、車ももちろん通らないような安全な扉であります。３年前から、附属小学校と附属幼稚園がやってらっしゃることをまねて、中休みを。１年生に、最初、幼稚園の園庭に遊びに来てもらう、後半は５歳児が１年生の中庭に遊びに行く潮見タイムを月に２回、２学期から始めたんです。

２年目の去年、１年生の先生方から、小学校に行きにくかった児童が、潮見タイムがあるなら学校に行きたいと言って、複数そういう声があったということで、月に２回ではなくて、毎週水曜日に固定化してもらえないかという１年生の先生からの御提案で、去年は

２学期から潮見タイムをさせていただいてたんです。

園児が減ってることもありまして、５歳児だけじゃなくて、４歳児も一緒にそのとき遊ぶように。そして、去年ずっと来てた２年生が、いいな、１年生だけということで、２年生もどうぞって、去年は１・２年生、４・５歳と潮見タイムをしました。後半は、年長さんが１年生になったときに、ペア学年になる５年生も関わったことがありまして、５年生も遊びに来てくれ、去年、だんだん広がってきまして。

そして今年、３年目は、１学期、１年生はまだ落ち着いてないけど、２年生、３年生は、潮見タイム楽しみにしてるからということで、１学期の入園式の次の次の日には、幼稚園児がまだ泣いてる子がいるような状態のところに進級したばかりの２年生、３年生が来てくれました。その子たちも進級して、ちょっと不安な気持ちもあるけど、幼稚園に行ったら、何か元気になって帰ってきたということで。年々、今、潮見タイムが広がってきてる感じで。

先日も、１年生の担任の先生から御相談を受けて、８月下旬から２学期が始まるんだけど、恐らく長い夏休み明けで行きにくい子がいるだろうから、生活科の単元の水遊びを、ぜひ幼稚園の園庭と小学校の中庭でコーナー遊びみたいにして、シャボン玉コーナー、スライムコーナーとか、幼稚園がいつもやってるような遊びを小学校と幼稚園とで一緒にしませんかという提案をいただきまして、ぜひぜひということで、そんなふうに潮見小学校の潮見タイムは盛り上がってきています。今回は１年生だけが授業として45分、潮見幼稚園で遊ぶことになりました。

それとは別に、潮見タイムを去年から緑保育所さんとかしおさいこども園さん、一緒によかったら、潮見小学校に上がる方がいっぱいいるので、遊びませんかということで他施設とも一緒に遊ばせてもらいました。あと浜風小学校に進学する子もいますので、浜風小学校にも、定期的に図書室だったり、校庭に一緒に遊ばせてもらったり、中休みに向かって、そうすると児童と園児との触れ合いができますので、そういうことを潮見幼稚園では今行っております。

多分、ほかの４園でも、それぞれ隣接していたり、隣接してなかったりしても、小学校に行くことは、自分たちが小学校に行くことの場慣れにもなるし、小学生と一緒に過ごすことは、すごく親しみを感じたり刺激をもらって、お兄ちゃんお姉ちゃんが縄跳びやってるとか、鉄棒やってるからやってみようという刺激もいただいたり。

そして、１年生、２年生にとっても、小さい子を優しくしようという、どちらにも互恵性があるような取組になってるかなと、うれしく思っております。

それとは別に、先ほど不登校のお話が出たんですけど、トライやるウイークでそれぞれ中学２年生が３校から来ていただいたんですけど、ほとんど毎日来てくれて、すごく楽しんでくれ、中学生にとっても園児と触れ合うと、園児からいっぱい吸収したり、自分が何かしてあげたいという気持ちが芽生えて、すごくいいことだなと思います。

実は、潮見中学校からお声が掛かりまして、３年生の家庭科の授業として、夏休みに手作り絵本を作るそうです。それを読み聞かせたり、中学生が考えたゲームを一緒にしたり、４クラスが４日間に分かれて、９月、潮見幼稚園に来るようなお約束ができました。２年生だけではなくて、３年生とも今後交流していけるなと、楽しみにしています。少人数になってもいろいろ工夫すればできるなと、今、思っているところです。以上です。

○河合会長　生き生きとした姿が見えてきました。私ばっかり聞いてると、委員長が諮問してるみたいな感じなので。感想とか御意見とか、田附先生。

○田附委員　整理をしてるところなんですけど。今のお二人のお話を伺ってると、２つ疑問が。

１つは、幼稚園の子供たちが、小学生、中学生のサポートをしているような印象を受けました。役割としてはいいでしょうけど、話が飛んでしまいます。よく老人ホームと幼稚園を併設してというのはありますけど、小学生と中学生の心の安らぎが幼稚園児と接することによってというのが１つの役割でしょうけど、それは非常にいいことだと思いながら、小学生と中学生はどうなってしまってるんだろうという疑問があって。

逆に、今度、木下先生にお伺いしたいのが、20ぐらいの施設から小学校に子供たちが来ていて、きっちり統計は取ってらっしゃらないと思うので、取ってらっしゃったらすみません。例えば、人数が少ないとか、どういうところ、どんな遊びをしている園から来てる子供たちが、例えば不登校になりやすいとか、あるいは問題行動を起こしやすいというようなことを、印象でお持ちであれば、お伺いしたいなと思ってお話を伺っておりました。

○木下委員　きっちりと統計取って分析して、この子はこうだからとか、定規のように図ることはできないので、その子なりの性格もあり何とも言えません。また、初めて出会う、その環境でまた新たな学びが深まることもあるので、少ないからちょっとなじめないとか、多いから大丈夫ということではないところはあります。

ただ、先ほど申し上げたように、就学前の施設のときにどんな学びをしたのか、やっぱり小学校現場の者がしっかりと把握しながら、より一層円滑な連携は、子供にとってはすごくいい学びにつながるのではないかなというところは、今もしてますけど、特に意識していかなければいけないなと思っています。

○田附委員　どんな学びというのは、例えばどんな学びが、議事録に残るので、お話しいただける範囲でいいですけど。印象として、どんな学びをしてきた子供たちが、まあまあ割と普通に、普通にという言い方もおかしいですけど。もし印象があればです。なければ、本当に個人差はすごくあるでしょうから。

○木下委員　いろんな体験というか、命の大切さなど保育の体験活動を通してとか、そんなに詳しくお話できないですけど、何かを一緒に制作したり、一緒に話し合ったり、全然意見が違うお友達でも話ができるとか、いろんなつながりとか関わりを持った取組は、本当に就学前はしっかり時間かけて丁寧にやってるので。そういった学びを、やっぱり継続し

ないといけないなと思ってるんです。ちょっと答えになってませんかね。

○田附委員　いいえ。

○木下委員　すみません、もしあったら言ってください。

○巽委員　一緒だと思うんですけど、自分で考えたり、自分で決めたりすることができるように様々な体験ができる。様々に感じられる、思える、考えられるという環境による教育がすごく大きいと思うんです。幼児期はそれをすごく大事にしてるんですが。

私、個人的には、新卒のときに私立幼稚園に勤めてまして、そこの幼稚園は結構、きっちり教えるとか、みんなで決められたものを上手に発表会でするとか、そういうことに力入れてた幼稚園に勤めてましたので。今思ったら、そのとき、そのほうがすごく大人は楽で、教え込めばいいですけど、今、私たちが目指しているのは、子供から引き出して、子供たちが実体験を通して学んでいくことの難しさと楽しさを、日々実感している毎日です。

○河合会長　ありがとうございました。

○田附委員　私立が出たので、あまり私立と公立と対立関係にするのはよくないなと思ったので。

実は私、子供たちの鬼ごっこを調べたりしてるんです。これは、愛知県の２つの私立の園で、片一方はまさに教え込む幼稚園。もう一つは、本当に子供を、言葉は悪いですけど、放ったらかしにするような、困ったときだけ先生がサポートする幼稚園。

そうすると、自由に遊ばせている子供たちは、３年保育なので年が上がるごとに周りの子供たちを観察して、鬼ごっこでぶつからないように行動するんですけど、教える、習うことをしている幼稚園は年が上がっても変わらないです。

だから、子供って、自分たちで遊んで、問題が起こっても、先生のサポートも受けながら自分たちで考えて解決していくことが、いわゆる非認知能力の一つと言われてる能力ですけど、やっぱり身につくんだなと、予想はしてたんですけど。そういう意味で、子供たちが自分で考える。先生方は大変だと思うんですけど、そういう幼稚園の教育ができる環境を、この芦屋市で継続してできていけばいいんだろうなと思ってるので。じゃあ、どうすればいいかと言われたら困るんですけど。

○河合会長　いろいろと私も考えさせていただくことはたくさんあります。また整理をして、次回なり、今回の終わりにでもお話しできるといいなと思います。

子供たちを中心にという、巽先生もそうですけど、子供たちを中心にということと、もう一つ言われたのは先生方ですよね、幼稚園の先生と小学校の先生。幼児教育の学生さんたちは小学校の免許を取るということ、多くの教員養成系とか幼児教育のところは推奨してやってますけど、実際に幼児教育と学校教育は、先生たちの意識とか教えることについての考え方がうまく交流できているか。

要するに、今取り組んでいることはとてもいいことだと思うんだけど、そういうことができる先生たちを教員養成教育の中できちっとできているんだろうか。要するに、今、こ

こで改革しようとしていることは、現場の問題でもあるけど、そこで教える先生方を次の先生方、そういう感性を持った先生方、そういう先生方をつくってくださいという形で、ここで閉じるのではなくて、国なりそういう課程を持っている、学部を持っている大学にお願いをしないといけないことになると思うんです。

その先生の印象というか感じとして、小学校の先生と幼稚園の先生で、これも難しい表現ですけど、うまいこと行ってるんですか。

○巽委員　人によると思います。

でも、小学校の先生から御連絡いただいて、ぜひ一緒にしましょうと言ってくださる方が増えてきているのと、あと、小学校の研究会の教材研究に、この間、潮見小学校の１年生が、研究会されたんですけど、その先生が事前に、算数の形の授業だったんですけど、どんな遊びをして成長してきたのか、幼稚園に来られて、積み木だったり、ブロックだったり、いろいろな教材を見られまして、それを生かした研究授業されていました。

うれしいなと、今までだったら、こちらが見に行かせてもらうことが多かったんですけど、小学校の先生が来てくださるようになってきてるので、少しずつは変わりつつあるのかなと思っています。まだまだ、昔の考えの方もまだいらっしゃるけれど。

○河合会長　同じようなことが、きっと幼保の接続の中でも出るというか、その話をよく聞くんです。こども園に移行していく、特に公立なんかで移行していくときに、両方の先生が入ってくる部分、そのときの摩擦というか、ちょっとした感覚の違いみたいなことを考えられている先生方もおられるけど、今は幼・小の接続ですけど、幼・保のところ。

○近藤委員　そんなに変わりはないというか、保育所・こども園の中の幼児クラス、３歳以上クラスの活動が、本当に幼稚園の４・５歳児の活動とほぼ変わりない、目指すところと保育目標も全く同じなので、そこの摩擦はあまりないようにも思います。

ただ、小学校の先生が保育所に来られたときに、４・５歳児などは関わりの経験を持たれている方も多いですけど、乳児さんを見たときに、全然、小学校のお仕事とは違うので、ちょっと驚かれたり。保育所って本当に子どもが中心ですけど、実は赤ちゃんというか、まだ歩けない子もいるのでその辺では、もう少し掘り下げて乳児から幼児の子どもの発達を学んだ上で子どもたちが小学校に来てるんだと思っておかないといけないなと思いましたという感想をいただいたこともありました。

そんなふうに、小学校の先生方がもっと小さいときの子どもさんの姿に目を向けてくださってるのを、すごくありがたいなと思っています。

幼・保の連携もすごく言われてるんですけど、実は言われ始めたからやってるわけではなくて、本当に私が新人で入った30年前ぐらいから、ずっと幼稚園との交流はあって。子ども同士の交流もあるんですけど、大人同士の研究会だったり、勉強する機会も一緒に学んできた中で、最近は小学校の研究会にも行かせていただいたりもしてます。

ずっとやってたんですけど、そんなに大々的にやってますという感じではなかったんで

すけど、ここ最近、幼・保の一元化がいわれて、新しいスタイルのこども園も生まれたことで、幼稚園と保育所とこども園というスタイルの３つの幼児施設ができたのはあるんですけど。その辺がまだ私たちも、そこに関係がない方は本当に全然分からないとは思うんですけど、何が違うといっても、幼児の就学前施設には変わりはないことと、求められる保育水準も変わりはないことを、私たちも認識し直したというか、前からやってることと変わりはないですけど、水準は一緒だよということを、もう一度、みんなで認識した上で、今、進めているところです。

小学校の架け橋期の交流、今、幼稚園さんもたくさん言われていて、たとえば小学校ごっこというのは、小学校になれるために小学校のお部屋に入らせてもらって、こんな机に座らせてもらって、鉛筆を持ってという練習をさせてもらうんですけど。それも、幼稚園と同じ日に行って、お部屋は人数が多いので別部屋になったりはするんですけど、そこに民間のこども園さんが来ていたり、芦屋にいる５歳児はみんな一緒なので、そんなところに参加させてもらうこともあったり、給食体験とか、そういうときも一緒にさせてもらってます。

幼稚園と保育所、こども園、私立園という中では、「なかよし運動会」もずっと学校区ごとにみんなで集まってする活動もあって、そこで顔合わすことで、一緒の学校に行くんだねと、１回会ったぐらいでは覚えられないかもしれないけど、〇〇小学校に行く子はこんないっぱいいるんだ、僕も安心だなと思って小学校に行く子もいます。

芦屋市の中ですごく連携は昔からあるので、そこはこれからもずっと続けていきたいし、本当に水準を一緒にすることで、幼稚園も保育所、民間のこども園、保育園もみんなが同じ水準で、場所は違いますけど、いろんな環境で。だけど、そこで学んだことが小学校に行ったときに生かされていくといいなと思います。

〇河合会長　幼・保の間でうまく意思の疎通ができているのは、とても重要なことだと思うのと、幼・小もそうですけど、その中での情報の共有というか、何がお互い起きているのかよく分からないけど、うちはうちだからという、そういうことは、これから先は、恐らくは非常に難しくて。

子供たちが活動というか学んで育っていく、そのプラットフォームをつくっていくときに、中にいる人たちが、うちはうちやからとすると、子供たちは、結局は垣根を越えながらやっていかないといけなくなるので、連続的に、子供たちが赤ちゃんのときから義務教育課程を終わるまでのところ、育っていけるような環境をつくっていくためには、今言ったような意識の共有というか。問題意識もそうですし、希望・夢もそうです。それが重要なのかなと思いました。

伊賀先生、野村先生いかかでしょうか。

〇伊賀委員　すごく取っ散らかってしまうんですけど、まず、この資料を拝見したときに、どんどん公立の幼稚園の値段が上がっていくのを拝見して、これは高いなと純粋に思った

のと、それに比べて、この円グラフを見たときに、公立の幼稚園は９％というのを考えたら、１割しかいないのに、この金額を市が負担してるのはどうなのかなと思ったのは、正直、事実として幼稚園の保護者ながら思いました。

ただ、芦屋市の教育委員会の方と教育懇談会を年に１回、幼稚園・小学校・中学校という芦屋のＰＴＡの方たちで集まって、こういうことで困っていますとか、芦屋市の中学校は、今こんなふうにやってますよというお話を聞いていただいたり、教育委員会の方のお話を聞いたりという会を設けていただいてるんです。私は、小学校と中学校が芦屋市の中で、そこに進学してる子が何％いるか知らないですけど、私立に行ってる方もきっといらっしゃるので。

ただ、幼稚園で芦屋市の１割なのに、それは教育委員会の方も、芦屋市の公立幼稚園、これで困ってるんですと言われても、そうですか、じゃあこうやって変えていったらいいですよねとはならないなとすごく目の当たりにしたという気持ちになったのと、よく先生方が、小学校に行ってますとか、保育所の方と遊ぶ機会を設けたんですよとか、こういうことやりましたとすごく教えていただいていて、すごくいろんなことを企画してくださっていて。企画してくださってるのに、そうか、公立の幼稚園は１割かみたいなのを、ものすごく先生方の負担も大変だったんだなと今感じたんですけど。

精道小学校と精道こども園が連携して話ししてますとか、潮見小学校がとか、今、先生方がお話ししてるのを聞いたときに、そうやって連携ができているのなら、このお金がかかっていっても価値はあるんじゃないかなと思ったのは一つあったんです。最初に駄目だなと思いながらも、そんなふうにつながっていくことができる核となれるのであれば、全然、それは大事なことじゃないかなって思ったんです。

私の子供は公立の幼稚園で年中を過ごして、こども園で年長を過ごして、小学校に上がったのですが、少しなじめないと感じる部分があったようです。いろんな子供がいるんだなと感じました。

公立のそのときの幼稚園、年中さんは14人でした。こども園は25人、25人の50人だったかな。うちは25人のクラスで、みんなで過ごしてたんです。人の多さって、いろんな子に触れ合ったから、別にいろんな子がいるんだって学ぶわけではなくて、本当に個人個人なんだなと感じたし。それで強くなるかなと思ったら、特に強くならないから、本当に性格なんだなと感じました。

私は、公立幼稚園が閉園したから、転園という形でこども園になったんですけど、そのときに、私は公立幼稚園がすごくいいなと思いました。そのときの園長先生が、幼稚園のいいところと保育所のいいところを全部合わせてこども園つくるので、安心してくださいとおっしゃってくれたんです。入園したら、コロナの関係もあったので、なかなか公立幼稚園のしてくださるような参観とかがもともとすごく減ったことと、保育所の子供たちのお母さんは、どうしてもお仕事をしてらっしゃるので、参加できないことが多いので。だ

から絶対数が、もともとが全然違ったので、参観の。それをこうすることはどうしてもできなかったし、コロナの関係でこっちに寄せていくという感じで、本当にすごく参観が減ったのがあって。

あと、今まで見られていたものが見られない、今まで先生ともうちょっとしゃべれてたのにしゃべれないことが、幼稚園の保護者はそれに対して、いいところは残ってないやんというのがすごくあったんです。全然、幼稚園のいいところが残ってなくて、保育所のいいところも、何だ？みたいな感じだったんですけど。

ただ、先生方個人と話されると、幼稚園から転任された先生も、私は知らなかったけど、保育所にいらっしゃる先生も、皆さん個人個人と話すと、すごいうちの子を見てくれてると思うことがたくさんあって、不満はなかったんですけど。

ただ、どうしても合わさったしまったときに、仕組みですか。例えばお昼寝があるとか、給食があるとか、システムに対しての不一致が、すごい保護者はしんどかったと思うんです。だから、保育所の保護者の方も、ちょっとそれって幼稚園寄り過ぎないみたいなことをおっしゃってる方がいらっしゃるのも聞いたことあったので。それをすり合わせて、今、西蔵こども園ですけど、すごくよく頑張ってくださっているみたいで、私は、今、西蔵こども園に行ってる保護者の方で、「いや、あそこはちょっと」みたいなことを言ってる方は聞いたことがないので、本当、うまいこと合わせて、先生方がやってるんだなと感じています。

そんなふうにできて、私は親なので、親も預けててよかったなと思えるようなところに子供を預けたいなと思うので。それが、まとまったものでできるなら、全然いいなとも思うし、子供を育ててて楽しいと思えたのは幼稚園だったので、幼稚園に預け続けているんです。でも、コロナじゃなかったら、もしかしたらこども園に預けてても、こども園が楽しいと思えてたのかもなというのは、先生方を拝見したら、すごく感じるので。

それって、きっと公立の先生の方も頑張ってくれたし、保育所の方もすごく幼稚園の教育、こういうふうにしてるというのを、ちょっと保育所的には厳しいけど、ちょっとすり寄せてみようかみたいなシステムというか、時間繰りみたいなこととかも合わせてくださってることが、きっとたくさんあると思うんです。

それをうまいこと合わせるような方法があったらいいなと思うし、それの核となるのが公立幼稚園になれるのであれば、ちょっと高いなという予算でも、もうちょっと頑張ってもらえませんかねという感じかなというのが個人的な意見です。すみません、長々と。

○河合会長　保護者というか、これも大事な視点だと思います。どういうふうに整理をしていけばいいのかということもありますけど。仕組みを組み替えていくときに。

もう一つ言われたのは、先生の側がそういうところ、システムが変わって、そこでどういうふうにやっていけばええか、両方ともの調整、その辺りの仕組みといいますか、そこの部分も少し、この中ではまた議論が必要なのかなと思いました。

○関係課（茶嶋）　２号認定こどもの５歳児はお昼寝をしていないので、皆さん、勘違いをされてるのではないかと。

○伊賀委員　いえ、それじゃなくて、お昼寝をすることによって、２時に帰るんですよね。２時に帰るんですけど、お昼寝の保育部の子は１時ぐらいから、多分寝始めるんです。そうすると、寝に行くよって寝に行くので、残った幼稚園部の子たちが、静かに遊んでねみたいなことが最初あったので。寝てる子がいるから静かに遊んでねとか、帰るときに、どうしても階段を、その前を通るので、静かに降りようね。当たり前なんですけど、寝てる子がいるから。

幼稚園だったら、別に帰る直前まで外で遊べてたら遊んでたみたいなことがあるけど、やっぱり寝てる子がいるので、外で遊ぶわけにはいかないみたいな話があったりとか。今はどうされてるか知らないですよ。私は、そのコロナもあったと思うので。それもあって、寝てるから気遣って遊ばなあかんねやみたいな感じのこととかを、最初の頃に、ああ、そうなんやって、ちょっと幼稚園と変わったねと感じたというだけです。

○河合会長　多分、同じようなことが幼・小のところでも、さっき授業の中で、授業としてやっているとおっしゃったんだけど。幼稚園の先生の授業と、小学校の先生のその辺の意識の違いもあるかなと思いました。

そういうずれというか、同じことを見ているんだけど、親側と先生側、もっと言うと子供側からすると、何か知らない間に。そこは、もうちょっと、ひょっとするとお聞きするかもしれないですし、教育委員会にお願いして、実際、どういうふうに、こども園なのか、登校していくときにあったのか、そういう資料を探していただいたりするかもしれませんので、よろしくお願いしたいと思います。

野村先生、いかがですか。

○野村委員　皆さん、いろんなお話、本当に勉強になるなというか、それぞれの立場のいろんな事情、話を聞いて。私は自治連合会から来ているので、地域の自治会の集合体のところから来てるので、あまり。

私も一応、子供が２人いるんですけど、２人とも大学生で、大昔、市立幼稚園に通わせていただいておりました。市立の幼、小と行ってるんです。お話も、ちょっと懐かしく聞かせていただいきました。

特に潮見は、幼・小・中、一貫校みたいな感じですよね、きゅっとなってて。裏からも行き来できるし、大きな畑があって、そこで大根育てたりとか、本当に連携という意味ではすごくいい立地なのかなと、私はすごく感じましたし、感謝してますし。

ただ、今、物すごい少なくなったというのは地域でも聞いておりまして、皆さん、こども園のほうに、お仕事されてるお母さん方が多いのでという話も聞いて。たまに通りがかったときに、園庭が、やっぱり遊んでるお子さんが少ないですよ、うちの子が行ってた頃に比べたら。ちょっと寂しいななんて思いながら、通りすがったりもしてるんですけど。

でも、それぞれ、皆さんの現場でいろいろな工夫をされて頑張ってらっしゃったり、保護者の立場からもお聞かせいただいて、どうすればいいのかなと、いろいろ、今、ずっと考えてるような状況ですけど。

もちろん、子供がいて、保育してくださってる方々とか学校の先生方がいて、あと同時に保護者と地域があると思うので。私たちは、地域の立場からどのように関わっていって、どのように盛り上げていけるのがいいのかなと考えていました。もちろん、すぐぱっとすごいアイデアは出ないですけど。

私も、実は小学校の頃、ＰＴＡの会長もやったりとかもしてたので、いろんな先生方とも関わらせていただいたり。自分が思うのは、皆さん、本当に真面目だし、熱心だし、それぞれの立場ですごく一生懸命関わってくださっている保護者の方も多いので、その人材が、芦屋ってすごい人材力があると思うんです。よく髙島市長とかも、ワンチーム、ワンチームとかおっしゃるじゃないですか。ああやって若い、すごく教育に対して熱量の高いトップがいらっしゃるので、みんながそうやって、いろんな知恵や力を合わせて、一ついい方向にまとまればいいと思いませんか。そうですよね。

すみません、本当に抽象的な回答で。具体的に何という感じですけど。私は自治連で、自治会連合会に具体的にサポートできるようなことがあればしたいなと思ってる次第です。何か逆にありますか。

○河合会長　地域が、今どんどん弱くなってきているんです、日本だけじゃなくて。前、オランダに仕事で行ったときに、向こうの大学の先生が、僕が行くので、近くの市を車で回って、放課後の時間帯。そのときに、外に遊んでいた子供が1、2人しかいなかった。外で遊ぶことが減ってしまって、遊び方が変わってるんだと言って。日本はどうなのという話で、いや、日本も、いろんな事情があるけど、外で群れて遊ぶことはとても減ってきている。

向こうも、昔は地域の声というか、町の人たちの声があって、何かしていたら、それはというようなこと。今はそれはなくなっているよねという話をして。それは、だから芦屋だけではなくて、日本全体の中で変わってきてるんだと思うんだけど。

でも、地域が、それを社会と置き換えていいと思うんだけど。我々は社会的な存在で、ほかの人がいて、初めて私が位置づくわけで。さっきからの議論、子供たちのお話は全部そうで。

先ほど、伊賀先生の言っておられたのもそうだけども、ほかの人と比べたときに。そういう土壌が崩れてしまうと、もはや子供を育てるとか、そこで学んでいくことの土台がなくなってしまう。そういう意味では、草の根でしっかりとやっていただいているのは、とても大事なことじゃないかと思います。

打ち上げ花火じゃなくて、じわじわと、途絶えることなく、絶えることなく。さっきの持続性、まさにそこだと思うので。

そういう活動と子供の育ちと学びをどういうふうにしていくのかが、やっぱりつながっていかないと、今、ここで議論していただいた新しい幼児教育、学校教育のあり方をつないでいく。どうしてつながなければいけないのかという理論武装も含めてやっていこう、そういうところなので。乗っかる土台をしっかりしないといけないのかなと思いました。

地域というか人材力というか、成田先生もそうですけど。芦屋に人材がある、それを使う。そこから、さらに広げていく。それこそ、西宮とか尼崎で阪神間は教育のメッカであるという、日本のモデルになるのではないかなと思います。

幼・小・中とおっしゃったんですけど、それも調べたりしてるんですけど、実はそういう学校もあるんです。また機会があれば教育委員会とも相談して、そういう事例をここで紹介させていただきたいと思います。

やっぱり、つないだらええというわけじゃないんです。そこで何をするのか。子供が一緒にいれば、自然発生的に何かいいものができてくるのではなくて、教育、保育、幼児教育、そういうものをきちっと設計しないと、くっつけたらいいという問題ではないです。だから、そういう意味で、おっしゃったことは、いや、一般的なことですからと言われたけども、意味のあることだと思います。ありがとうございました。

今までのところで、かなりいろんな取組をお聞かせいただいたんですが、補足というか、市としてもこういうことをしてますよというのが、もしあれば。

この資料も読ませていただきましたけど、古くなりますけど、平成28年の、接続期のカリキュラムも、ちゃんとこのときに議論されていると思うので、何か補足すること等、お教えいただけたら。

○事務局（長岡）　本日の御審議の中で、就学前と小・中の縦をつないでいく取組について、それぞれの先生方からお話を聴かせていただいておりますし、縦だけではなくて横のつながりもしているところで、そういう連携は今もしてますけど、今後ももっともっと充実させていく必要があるのではないかというところは、教育委員会としては考えてございます。

例えば、先ほど架け橋期プログラムという言葉も出てきたと思います。国においても、縦横のつながりは非常に大事だと言われておりますので、私に代わりまして、幼稚園担当の課長が今日来ておりますので、国の動きであったり、そういったものも含めて、先ほど会長がおっしゃっていただいたような、現行の接続期カリキュラムについても、御説明をさせていただければと思っております。

○内藤教育室主幹　幼稚園担当の内藤と申します。よろしくお願いいたします。

先ほどから接続についてのお話がありまして、国でもそのことを、とにかく進めていく重要性を唱えています。

令和５年２月に、中央教育審議会では幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会がありまして、そこで幼・保・小、こども園の協働による架け橋期の教育の充実と言われるようになっています。これについて、いろんなところで架け橋期プログラムを作成する動きに、

国自体、市町村の教育機関はそういうプログラムをつくるような流れで、ずっと動いていっています。

芦屋市でも、実は接続期カリキュラムを以前、平成28年につくりました。そのときは、精道小学校区域が中心となって、幼稚園と保育所が一緒になってつくったんですけど、みんなそれぞれの事情があったり、それぞれの保育があって、進め方だとかがあって、なかなかそれが定着するところには至りませんでした。

ですが、今、こうして文科省から言われるようになって、幼児期は遊びを通して小学校以降の学習の基盤となる芽生えを培う時期であって、小学校においてはその芽生えをさらに伸ばしていくことが必要であると、１つの文章の中に、就学前と小学校が一緒になって子供を伸ばしていきましょうと明確に言われるようになっていますので、まさしく違う施設が力を合わせて、子供を伸ばしていきましょうという時代に変わってきています。

芦屋市の今の状況ですけど、まだ架け橋期プログラムをつくるところまでは行ってないですけど、それをつくりたいと動き出してるのが今の現状です。

小学校と幼稚園、小学校と保育所だったり、昔からちょっとずつつながっていまして、体験給食に行かせていただくとか、プールに行かせていただくのをしてたんですけど、それは経験とか交流であって、接続ではなく。今、接続と言われているのは、単発的な活動ではなくて、カリキュラム、もう授業の中の１つとして考えていきましょうと時代が変わってますし、それを、先生たちも割と意識して取り組むようになっているなと思います。

１つの例としまして、西山幼稚園です。西山幼稚園は、小学校とのつながりもあったんですが、１つ大きく違うのは、近隣の民間の施設、個人名を出しますと漣美学園の芦屋川ナーサリーだったり、山手ナーサリーと一緒に西山祭り、秋にお祭りをしたんです。そのお祭りも単発でするのではなくて、つくるところから一緒に。そして、それを小学校の校長先生に見ていただいたり、小学校だけの交流をというのではなくて、就学前施設でつながって、一緒に学校につなげていきたい、つながっていきたいというのが、今、大きく変わっているところだなと思います。

ですので、今まであった小学校との交流も交流ではなく、事前に小学校の先生とちゃんと打合せをして、今の子供たちに何が必要で、どんな経験が生かされるのかという話をちゃんとして、積み上げながら交流もしていますし、そこに民間の施設も一緒に、今、やり始めているところが、芦屋市の就学前と小学校をつなぐ架け橋期プログラムの、今、出だしと言いますか、そんな状況になっています。

おっしゃられたみたいに、本当につなげればいいというのではなくて、０歳から18歳までの子供たちがちゃんとした理論の下、計画の下につながっていくのが大事だよねというのは、一応、認識としては、芦屋市の中ではあるなと思っていますが、そこをどう一歩を動かしていくか、これからの課題になってくると思っております。

もし、今のお話の資料が次回までに、よろしければ用意。国の動向とか、芦屋市の、今、

どんな流れで架け橋期のプログラムが進んでいるかどうかという資料、もしよろしければ、次回までに御用意させていただくことは可能です。

○河合会長　ぜひ、お願いしたいと思います。

つないでいくとき、国のその架け橋期、幼・小をつないでいきましょう、その移行期が大事なんだ、そこの部分はよく分かるんですけど。発達の段階で、小学校の学年で１年生、２年生、まあ３年生ぐらいまでと、４年生、５年生、６年生ぐらいまでのところは、実は違う質のもので。１年生から３年生までのところが、幼児期に持っている心理的な特性が、学童期で形成されるような社会的な存在としての私をつくっていく移行期なんです。

だから、１年生のとこへつなげばいいというのではなくて、グラディアルというか、グラデーションというか、そういうことを考えないと、先ほども内藤先生、つなげばええということは考えてませんとおっしゃったんですけど。いや、どこまでをどんな形でつないでいくのか。

つなぐことの意味はよく分かっていますし、審議会の様子もよく知っているんですけど。具体にどうするのか、どの部分が、何が大事だったのか。実は大事だったものが、国の審議会の中には残っていないと僕は思っています。幼児教育のところにすごく大事なものが入っているのに、小学校の教科教育に入っていくと、それが消えちゃってるんです。

さっきからずっと議論されているのは、非認知的な能力とおっしゃっていたんですけど、その部分だと僕は思います。そっちへ誘導していこうなんてことは思ってませんけど、でも、この部分、幼児期にとても大事だと言われていたものが、小学校に行ったらどこ行ったのと、そういうことをみんなで議論できたらいいと思うので、ぜひ資料を用意していただいて、それを私はこういうふうに読み取ったんですけどというので、委員の先生方に投げかけさせていただいて、芦屋の教育ってどうしたらいいんだろうということを、また考えていただければと思います。

資料を作っていただくということですけど、20分か30分の間には閉じるようにはいたしますけど、あえて言うと、困ってることは、いや、それは言ってはいけないと思ってみえるかもしれない。

さっきのお話をお聞きしていても、頑張っていて、そういう方向でいいよね、子供たちも幸せよね。だけども、何か困ってることってないでしょうか。さっきの順番でお聞きして。巽先生。

○巽委員

この審議会で話すことではないと思うんですけど、日本の子供の将来を考えると、幼児期に大切にしているもの、非認知能力をもっと小学校・中学校でも引き続き育てていただきたいなと思うので、先生たちの交流で、先生が幼稚園の先生の言葉掛けを見るとか保育を見ることで、お互いに学び合えるんじゃないかなとすごく思っています。

○木下委員

幼・小・中の先生たちが、お互いの立場を理解して一緒になって分かり合うとか、知り合うことも大事かなと思います。

○河合会長　それぞれのところで努力されていることは、全く否定しないです。何が言いたかったかというと、どういうふうにつないでいくのか、要するにこういうところがうまくいってないよね、今はうまくよさが消えることだけど、どういういいところが小学校に行くとうまくつながらないんだろう、そこをきちっと明確にした上で、どうすればいいのか、どういう仕組みを考えればいいのかになろうかと思うんです。

だから、それぞれのところで、今できることをできる範囲の中で。やっておられることは、それは間違いのないことなので。その努力に対しては、みんな、敬意を払わないといけないと思います。

近藤先生、いかがでしょうか。

○近藤委員　困ってるところは、一昔前はなかなか待機児童が解消されないとか、ここでの問題とは違うかもしれないけど、地域の方のニーズに応えられない部分のジレンマとかがあって、公立も定員が決まってるし、幼稚園も定員が決まってるし。の中で、でももう少し長い時間預かってほしいという方がどんどん増えてきたときに、公立も広げたいですけど、いろんな事情や限度があるのでといったときに、民間の保育園が誘致されて開園したことで、そういうニーズにも対応はでき、待機児童も徐々に解消されて、今ではほとんどいないとは思うんです。

その中で、いろんな特色のある園があったり、幼稚園と公立保育園だけでも交流で、一緒にもするんですけど、それぞれが絶対同じことはないので違いもあったんですけど、今は私立園さんの数が多いので、公立保育所・こども園４園しかないので、数も増えた中で、でも、芦屋の中の５歳児と言えばみんな一緒なので、もう少しそちらとも交流というか、そちらの園がどんなことをされてるかが見えてない状況だったので。

公立幼稚園さんとは関わりを持たせてもらったり、一緒に行事をさせてもらってるので分かってるんですけど、ここの民間さんの５歳児はどうなんだろう、ここの民間さんの５歳児どうなんだろうは、まだまだ分かってないので。別に統一しようとは思わないんですけど、それぞれの園の状況も知った上で、そこの園の方たちの先生はどんな思いでされているかを知った上で、じゃあ、芦屋の就学前の子どもたちはどのように小学校に上がっていくのか、ほかの園のことだから関係ないわではなくて、自分たちももう少し、一緒に考えていかないといけないのかなというところはありまして。

ただ、それをどうやっていこうとか、それを小学校の先生方とどんなふうに共通理解していこうという形は、まだ全然できてないと思うんです。

ただ、この間も少し民間の園の先生方と集まって、まずは交流から始めていきましょう。近くなったところで、カリキュラムを一緒に考えるとか、今どんな教育されてるか理解し合うとか、そういう機会をもっともっと持っていかないといけないなと思ってるんです。

今までなかなか機会が持てなかったものを、これからはみんながそういう思いで、職員がそういう思いを持つことが必要である、困ってるよりは、そうしていかないといけないなと思っています。

○河合会長　何気におっしゃったことですけど、重要なことが。公立と私立の問題も。子供を中心にって、子供が生き生きと伸び伸びと育っていくようにと言いながら、公立の幼稚園の特色、保育園の特色、私立の特色があって、そこがうまく調整ができないと、極端な言い方をすると、本当にいい保育ができるんだったら、公立でなくてもいいかもしれない。

○河合会長　私立に委ねることができない、私立のこういうところがというのがあれば、公立がそれを担うべきであるし。時間もそうだし。そうじゃなくて、お互いにいいところがあるんだったら、それをハイブリットでつなぎ合わせながら、子供たちにとってよりよい、要するに選択肢が増えていくということなので。だから、選択肢をどういうふうに考えていくのかということかと思うので。

私立については、この中でも少し考えておかないと、芦屋市が、公立がよければいいのかという議論になってしまうと、いや、そうではなくて、選択肢を増やしていって。もしくは、その選択肢は非常に質のいいものを増やしていくことかなと思いました。

○近藤委員　少しつけ加えさせていただいたら、民間の園は法人さんで、いろいろな理念を持って方なおられる方ので、特色は全然違うとは思うんです。別に、それは否定するわけではないですけど。芦屋に住んで、芦屋の子どもたちが行く芦屋の学校、中学校に進んでいくための、だったら芦屋の幼児教育はどうするのかなといったときには、公立幼稚園と公立保育所、こども園が土台となって、芦屋の幼児教育ってこういうのだよと自信を持って言える教育をすることが大事ではないかなと思うんです。

そこに民間さんが増えてきたときに、芦屋の教育はこういうことをされてるんだな、うちの特色も加えて、うちはこういう教育をしていきましょうというのが増えていくことは、全然いいことだと思うんですけど。市として、小学校に上がる前の幼児期の教育・保育は、保育所とこども園と幼稚園とがちゃんと持っていないといけないなとは思っています。

○河合会長　そういう意味では、ニーズを、私たちは謙虚に聞かせていただいて、加えていくことは必要かと思います。

時間が迫ってまいりましたが、田附先生、もし何かありましたら。

○田附委員　日程調整を見させていただいてると、ひょっとしたら10月、11月はオンラインじゃないと私は参加できないかもしれないので。

○河合会長　田附先生、日程の件は後ほど。

○田附委員　ですので、もし参加できなかったら駄目なので、発言させていただいていいですか。

○河合会長　そういう意味で。

○田附委員　すみません。

まず、伊賀さんがおっしゃった園児１人当たりのコストです。これが高いのか安いのか、私、分からないです。だから、何を基準に考えたら高くなって、何を基準に考えたら安くなるのか分からないなと思うので、印象的にはあっと思うんですけど、多分、全国平均を出したところで、高いところもあれば安いところもあるので。一応、数値としてはこういうふうになって、増えていくという認識でいいのかなと思います。

あとは、私立のこども園に対しては、全体でかかる費用の４分の１が66万円ですよね。という意味でよろしいですか。

○事務局（長岡）　スキームとしたら、何歳児であれば幾らという公定価格がありまして、国が２分の１、県４分の１、市４分の１という拠出になるんですけど。市独自で園さんに助成をしている部分もありますので、きれいな数字にはならないところはあります。一定額は国・県から入ってきています。

○田附委員　だから、もし、これ全部市が賄ったら、単純に計算すると４倍になる、そんなことではないですか。

○事務局（長岡）　他の要素もありますが単純に考えると。

○田附委員　そういうことなんですね。

○事務局（長岡）　市単独の助成も入ってますので、なかなかその辺は難しいところです。

○田附委員　あと、一番最初に巽先生が、卒園した保護者がフルタイムで働きたいから、すごくいろんな事情でできないのは分かるんですけど、暴論かもしれないですけど、じゃあその人たちが子供たちを通わせられるような幼稚園の仕組みに変えられるのであれば、進めていければいいのになと思いながら、次、近藤先生がおっしゃったかな、いろんなこども園と保育所と幼稚園で、園にお勤めの先生方と、施設からしたら、それぞれ別だけど、子供たちにしてみたら、何歳のときにそこに行ってる施設は自分にとっては唯一の施設で、河合先生がおっしゃってるように、その子供にとっては、子供中心で考えたら、どこの施設だということではないと思うので。

そしたら、これも暴論かもしれませんけど、連携が絶対いいということではなくても、保育所と幼稚園が連携して、同じ施設か隣の施設で、この年齢までは保育所できちっと保育して、この年齢からはそのまま同じところで幼稚園教育になっていくみたいな形で、そういうふうに進められたら、よそに行かなくてもいいようになったりするのかなと、単純過ぎますけど、感じました。

たしか私の記憶だと、髙島市長と慶応義塾大学の中室先生が教育のお話をされたと思うんですけど、去年、日本子ども学会で、中室先生が幼児教育の質評価スケールという発表をシンポジウムでされたんです。そこでおっしゃってたのが、保護者の評価と幼児教育の質評価は全く乖離しているとおっしゃってて。

それは何かというと、保護者は、駅に近いとか通わせやすいところ、預かってくれるところだけど、実は違うんだと。質評価スケールについては、私も念入りには調べてないで

すけど、ちょこちょこっと調べて、発表を聞いたところではそうだったので。

そうすると、子供中心に考えたときに、芦屋市がどんな幼児教育、保育も含めてしていくかを考える必要があるんだなと思いました。

あとは、小学校の先生は大変なのは、中学校の先生、これも暴論ですけど、ヨーロッパの、ドイツが一学級が20人から25人で、先生方は部活もないし、夏休みは学校にも出てこないので、教材研究とかすごくやるんです。結局、今の状態だと、先生方、教育に夢を持って入ってこられたけど、でも現実には、今朝の新聞にも載ってましたけど、先生の仕事があまりに大変過ぎて、自分が子供を持ったら辞めていくという現状もある。多分、頑張ろうと思えば思うほど、先生が倒れてしまうんだろうなと思うので。

これは完全に暴論かもしれませんが、芦屋だけでも一クラス20人学級とか25人学級で、それは教育にどこまで本気でお金をかけるかということだと思うんですけど。そこまで行かなくても、そういうことを考える機会がもしあれば、せっかく幼稚園でされたことが、そのまま少しは改善されていくのではないかなと思ったので。

すみません、しゃべり過ぎました。と思いましたので、お話しさせていただきました。

○河合会長　最後、ずっと記録を取っていただいていた、全体を見ていただいている成田先生。

○成田副会長　いや、今日はまた前回より難しいですね。いろんな御意見が出てきたかと思います。

幼・保、幼・小、小・中、それぞれの連携を中心に、今、困っていることですとか、理念的なこと、そういうことも出てきたかなと思っております。これを、現実のベースに乗せていくことは、この審議会で恐らくは求められていることではあります。

ただ、まだもう少し時間はございますので、今いただいたこと、まだ消化し切れてない部分もあるんですけど、文科省の言う「架け橋期プログラム」における幼児教育と小学校教育の接続に関して、河合先生と一緒に、いろいろと相談しており、内容的には理解するところはあります。しかし、河合先生が御指摘のとおり、具体的にどう芦屋に落とし込むのか、そういうところは非常に乖離があったなと思っています。

もう少し、先生方の今日いただいた御意見も含めて整理をした上で、また、「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」の資料も御用意いただけるということですので、共通理解を持って、先に少しずつ進めていければと思っております。

まだ年度いっぱい、しばらくございますので、もう少し着実に足を進めていければなと考えているところです。まとめに全然なってなくて、大変恐縮ですけど。それだけ、いろいろ先生方に御議論いただいたかなと思っております。

○河合会長　いや、まとめになっているかと思います。ありがとうございます。

架け橋期をつくった審議会としての範囲で、応用可能性で考えると一番広いものになって、これ大事だよねという書き方をしているんだと思います。芦屋は芦屋のやり方という

か、そういうことを考えていけば、私はいいのかなと思います。

今日、審議会、時間をいただきましたけど、人口統計から行くと、動態からいうと非常に厳しい状況であって、何らかの形で仕組みを考え直さないといけない、そういう段階にあるということについては、共通理解をいただいたと思います。

その修正をかけていく中身が、数をどういうふうに減らすかではなくて、その中身をどういうふうに組み替えるのかということで、実際の今されている取組とか内容について、今日、お聞かせいただいたと理解しております。

ですので、次回は具体的に組み立てていくとする。１つの解を得るのではなくて、幾つかの可能性を考えていきたい。もちろん、その中には子供もたくさん芦屋に来ていただく、そういうのもあるかもしれませんけど、実際はこのままでは成り立っていかないというか、厳しい状況になるので、それに対して予期的な行動といいますか、準備的な行動を幾つか考えましょうということになろうかと思います。

何よりも重要なことは、その中心にあるのは子供である。やっぱり芦屋の子はちょっと違うよね、強靭性というか、今風の言葉で言うとレジリエントになるのかもしれないですけど。そういう子供たちに育ってもらって、日本を変えていってもらえるような子供たちって、どんなふうに私たちが準備して頑張れば役に立つのか、次から考えていっていただきたいと思います。

私の役割は、できたらいいなという皆さん、先生方のお考えをできるようにするにはどうしたらいいかな、その間をつないでいく仕事かなと思いますので、前回の最後に成田先生が言われたように、思ってることは言っていただいて。

それでは、本日の審議はこれで終わって、事務局にお返しいたします。

○事務局（長岡）　本日は長時間にわたりまして御審議いただきまして、ありがとうございます。

第１回目のときも、皆さん、認識し合っていただいたと思いますけど、改めて、どの施設に通っていようが、芦屋の子供として何が最善なのかの視点と、会長もおっしゃっていただいたとおり、子供を常に中心として考えていく中で、今日の御議論では、就学前と小学校とか中学校につないでいくとか、就学前施設を横でつないでいく。そういったところについては、どの子供にとっても重要なことであるかなと認識させていただきました。

次回以降につきましては、そういった視点も含めまして、議論をさらに深めていければなと思っております。本日は、どうもありがとうございました。

この後、日程の調整をさせていただきますので、その場でお待ちください。

○河合会長　次回の資料はできれば。

○事務局（長岡）　早めにお送りしたいと思います。

○河合会長　早めに送っていただいて、目を通しておきたいと思います。よろしくお願いいたします。

以上